



## 《 敬老の日に寄せて 》 『 敬老の日 』 昔話の「姥捨て山」伝説!?



9月15日は「老人の日」。あまり聞きなれない記念日ですが、祝日「敬老の日」制定とも関わりがあります。「老人の日」の起源は戦後間もない昭和22年。兵庫県野間谷村（現・多可町）で、終戦後の焼け野原で意気消沈しているお年寄りを励ますための行事が9月15日に開催されました。そして、その3年後には兵庫県がこの日を老人福祉の意識向上のために「としよりの日」と制定しました。

昭和38年の老人福祉法発布とともに「としよりの日」は、よりイメージよく「老人の日」と改められます。さらに昭和41年に「老人の日」が「敬老の日」として、老人を敬い感謝する祝日となりました。このとき「老人の日」はいったん消えましたが、平成13年の老人福祉法改定とともに、再び同日が「老人の日」に。この日から1週間を「老人週間」として定められました。（現在、「敬老の日」が9月第3月曜日の祝日となり、「敬老の日」と「老人の日」は完全に分離）

戦後一貫して伸びてきた日本人の平均寿命。その大きな理由が公衆衛生、医療技術、食生活の向上にあることは確かです。統計が開始された1947（昭和22）年の平均寿命は男性が50.06歳、女性が53.96歳でした。それが2017年の日本人の平均寿命は男性81.09歳、女性87.26歳と、終戦直後から30年以上延びていて、世界的にもトップクラスの長寿国であることはご存知の通りです。

さて、そんな日本には貧しい寒村で「棄老」と呼ばれる風習が行われていたという伝説も残っています。いわゆる昔話の「姥捨て山」や、その伝説を下敷きにした深沢七郎の「檜山節考」（1957年）などで、特に戦後、「昔は貧しい村では口減らしのために、年取った両親を息子が山奥に捨てる風習があった」、と素朴に思い込まされ、海外でも日本には棄老習慣があった、と今も信じられているようです。けれども、実際にはそのような習慣・風習があったという明確な記録はなく、単なる言い伝え、俗説の類であろうと今では考えられています。長野県の冠着山は「姨捨山」（おばすてやま）という異名がありますが、その山が棄老の山ではなく、「おばすて」は地形を表す地名が由来です。

では、本当に「姥捨て」という行為はなかったのでしょうか。静岡県の伊豆地方には棄老伝承があり、また岐阜県の飛騨地方、吉野村には「人落し」という崖があつて、62歳になるとそこから落とされたという噂があることも記しています。このような記述からは、決してどこでも当たり前のように行われていたわけではありませんが、ときのある地域で行われていたこともあったかもしれない、ということも伺わせます。いずれにしても、基本的には「ご隠居が山奥に捨てられる」というようなことは、めったにあることではなかったようです。

漫画家：小川幸辰（おがわ甘藍）

